

## 「復活」(マルコ一六章一〜八節)

### 1 信仰の始まり

今日はイースターです。イエス・キリストが甦った日、復活の日曜日。十字架につけられて死んだイエスがこの朝甦った、詳しくいえば甦らされた、神によってもう一度命を与えられ、復活した、そのことを私どもは喜び、祝い、今日の礼拝をささげています。

甦り、復活です。甦りというのは、地上の生命を取り戻す、息を吹き返す、蘇生と違うとは違います。

じつさい息を吹き返したとしても、その人はもう一度、いつかまた、今度は本当に死ぬことにならざるをえないのではないのでしょうか。命あるものは死を免れることはできないからです。

人間は死を免れることができない。ということとは、言葉を換えていえば、私ども人間は死によって絶対的に支配されているということです。しかし死んで甦るといふことがあるとすれば、そしてイエスはどのように死んで甦ったのですが、それが意味するのは、死の支配は絶対的ではない。いな、もともと絶対的なものではなかったことが明らかになったということです。死に死がもたらされた。死が打ち負かされた。むしろ死に優越する神が、神の命が、勝利したということにほかなりません。

これが、イエスが死んで甦った、死んで復活した、つまり息を吹き返したのではない、地上の生命を取り戻したのではないことの意味です。そしてイエスは人として死んで死に打ち勝ったがゆえに、私どもも、このイエスの命にあずかることが許される、信仰によってあずかることができる、こうした命に、死んで甦る命に聖霊によってこの地上で私どもはあずかることができる、それが私どもの信仰です。むしろこうしたことは、初代教会の中で少しずつ明らかになっていったことではあります。根本的には、甦ったイエスが、多くの弟子たちに、復活の体をもってじつさいにご自分を現してくださいましたことに基づいています。復活のイエスが現れたことが、復活信仰の原点です。

その間の事情を使徒パウロは、コリントの信徒への手紙一で、次のように書いています。

最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。キリストが聖書に書いてあるとおりにわたしの罪のために死んだこと、葬られたこと、また聖書に書いてあるとおりに三日目に復活したこと、ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。次いで、五百人以上もの兄弟たちに同時に現れました。・・・次いで、ヤコブに現れ、その後すべての使徒に現れ、そして最後に月足らずで生まれたようなわたしにも現れました(一五・三〜八)。

ここで大切な言葉は「現れ」「現れた」という言葉です。くり返されています。ケファというのはペトロのことです。

死んで甦ったイエスが、復活したイエスがその体をもって現れたのです。ペトロをはじめとして弟子たちに「現れた」、そしてキリスト教徒の迫害者であったわたし。パウロにも現れたと証言しています。

使徒たちがこうして復活のイエスに出会った、むしろ復活のイエスがご自分のほうから出会いたもうた、現れた、その事実、それがキリスト教信仰の始まりです。そしてその事実とその証言の上に教会は立っています。いらい私どもはこの生けるイエス・キリストを私どもの主として、世界の主として信じ、告白し、賛美し、証ししているのです。イエスの復活がなかったならば、イエスが死んで甦り、そのことをご自身現されることがなかったならば、私どもの歩みもなかったことです。

イエスの甦り、復活、その現れ、それがすべての始まりであったがゆえに、今日私どもはそれを祝い、それを喜ぶのです。私どもは「ハレルヤ」（主はほむべきかな）と歌いましたし、このあとと歌います。すべてを差しおいて喜ぶこと、心を高く上げることが、イースターのこの日、私どもに、もつともふさわしいことであるに違いありません。

## 2 「ここにはおられない」

死んで甦ったイエスが弟子たちにご自分を復活の体をもって現され、そこからすべてが始まったといま申し上げます。

今日の聖書箇所は、復活信仰が私どもの信仰の中心に位置するようになる前のことです。イエスの復活を伝える一番古い証言で、それに最初に接した婦人たちのことが伝えられています。

ここを見ると、私どもがいまイースターを祝い、復活信仰を私どもの中心として言い表すさいの喜びを示すものは何もありません。それどころか、驚きや恐れ、おののきを示す言葉しか私どもは見いだすことができないのです。今日の箇所の最後は「恐ろしかった」で終わっています。

婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである（八節）。

ここにあるように婦人たちは恐ろしくて黙っていました。「だれにも何も言わなかった」のですから、イエスの復活は、直ぐには弟子たちには伝わりませんでした。伝えられても信じなかったでしょうけれど（一六・一一）。じっさい弟子たちにも婦人たちにもイエスの復活の知らせはまったくもって思いもよらないこと、まったくもって予想外のことであったのです。

それゆえといたたらよいでしょうか、イエスが死んで、しかし三日後に甦ったことは、その日墓を訪れた女性たちの証言は、それだけ真実だといってよいようにも思いません。彼女たちは復活の最初の証人です。しかし沈黙しその役割を果たさなかったことよってかえって復活の最初の証人であったようにも見えます。彼女たちの作り話ではない。その動機がないことは、この女性たちの驚愕、恐れ、おののきに示されて

いるように思っています。

イエスの甦り、復活は、告げられたことなのです。神の使いとしての「白い長い衣を着た若者」がこういいます。

驚くことではない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない・・・（六節）。

ところでイエスの復活、甦りを巡る聖書の記事の中で、いわば客観的に確認できる事実は、二つしかないといわれます。一つは、墓の入り口に置かれていた大きな石が「わきへ転がしてあった」こと、もう一つは、墓が空っぽだったということです。

このことは、だから復活したというのではありません。復活を「証明」することにありません。マタイによる福音書の終わり近くに（二七、二八章）、こんな挿話があります。祭司長たちと長老たちは墓を訪れた女性たちの動きをキヤッチして、墓を見張っていた兵士等に多額のお金を渡して、弟子たちが夜中にやってきてわれわれの寝ているあいだに死体を盗んで言ったと言いつつ触らせと命じ、兵士たちはいわれた通りにした、この話はユダヤ人の間に今日まで広まっている。つまり墓が空だったというだけでは、イエスの復活の証明にはならないのです。

そうすると、私どもは、やはり、はじめに申し上げた、弟子たちが復活したイエスの「現れ」に接したというところにもどっていくことにならざるをえないのです。イエスは、ご自身が生前語っていたように復活し、弟子たちにご自分を現した、弟子たち・使徒たちのこの証しをアーメンと受けて入れる、このことが私ども教会の信仰です。使徒たちの証しとは聖書のことです。ですから教会は聖書に固く立つて復活の信仰に生きるのです。

### 3 復活の信仰とは

神ご自身がみ使いによって御子イエスの復活を伝え、また使徒たちがその復活のイエスの「現れ」に接し、その証しに基づいて私どもも復活の信仰に生きる、それを信じ歩むことが許されていることとなります。

その復活の信仰とは何か、今日の箇所から、二つのことを取り上げ少し申し上げてみたいと思います。

一つは、神の使いである若者の告知にある言葉です。「あの方は復活なさって」という言葉です。「復活」という言葉自体は目を覚まさせる、起こす、立ち上がらせるという意味です。それがイエスの「復活」という意味で用いられています。ただ注意したいのは、受け身の形になって、詳しく訳せば、「復活させられて」となっていることです。イエス自身が自らの力で死の束縛から脱したというのではない。そうではなくて、神によつて甦らせられた・復活させられたということです。神は死人の中からイエスを立ち上がらせた、彼を死人の中に死人の一人として放置することをなさらなかったということです。

それは神がイエスの、十字架の死に至るまでの生き方を受け入れた、肯定なさった

ということですが。人間によってイエスが否定されたことが十字架の死であったとすれば、神はこれを肯定したのです。イエスの生き方は、神と等しい者でありながら人となり、己を低くし、僕となつて私どもとともにいまし、私どもの重荷を、私どもの悩みと苦しみと悲しみをご自分のものとしてにない、そこから私どもを救うという生き方をした方です。これが神がイエスに求めた生き方であり、メシアとしての生き方でありました。それをイエスは最後まで生きたのです。神がよしとして受け入れてくださった、それが復活です。それによって私どもも神に受け入れられる道が、信仰によって受け入れられる道が開かれたのです。

もう一つ、七節の小さな言葉に注意したいと思います。

さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。「あの方は、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。かねて言われた通り、そこでお目にかかれる」と(七節)。

小さな言葉とは「ペトロに」です。これをもっと強調して「ペトロにも」と訳すことができず。「弟子たち」という中には、その筆頭としてもちろんペトロも入っているはずですが。しかし神の使いは、わざわざペトロという名を加えたのです。「ペトロにも」です。

ご存じのようにイエスの受難の出来事の中でペトロがイエスを否むということが起こりました。最後の晩餐のあと、いささか気分が高揚していたのでしょうか、ペトロは従う覚悟をイエスに問われ、自分だけは決してつまづいたりしない、裏切ったりしないと勇ましく言い放ちます。しかしそれから数時間後、彼は思いもかけないところで、つまり大祭司に仕える女中の一人の、あなたも裁判を受けているイエスと一緒にいたという何気ない問いかけに、これを激しく否定し、信仰の、ある意味で決定的な挫折を経験していました。

そのペトロに、ガリラヤへ行け、そこで会う、そう伝えよと、神の使いの若者は婦人たちに託するのです。「ここにはいない」、イエスはガリラヤにいます。「ペトロにもそう伝えてくれ」。彼はイエスを否んだ。そのかぎり十字架の死への引き渡しに関わりをもつことになった。しかしいま、死に引き渡されたイエスご自身が、その方のほうから、ガリラヤで会う、先に行っているから、というのです。それはペトロにとって驚くべきゆるしと招きの言葉以外ではありませんでした。

イエスの復活は神の肯定です。その神によるイエスの肯定の中に、イエスを十字架につけた者たちの罪のゆるしが含まれています。このことを深く知ったペトロはついに自らの命を投げ出すまでにイエスに従い行くことになりました。復活のイエスの現れに出会ってペトロは別人になった。このことこそイエスの復活が本当のことであったもつとも有力な証拠だといってよいのではないのでしょうか。何かがなければそんなふうにならないからです。それゆえ復活のイエスとの出会いの中に私どもの救いも、私どもの生まれ変わりもあるのです。

(二〇一九年四月二一日)